

「もの」という用語の使い方の違いに過ぎないのではないかとの反論に答えるべく、まず *Dicta* の理論のかなり長い分析を行い、次にそれを *status* としての *esse hominem* に適用するという途を辿る。結果として、*Socrates est homo* は三つの部分から成立つのではなく、主語 *Socrates* と動詞句 *est homo* の二部分から成ること (single part theory と称される) がアベラールの主張として描き出される。この部分の議論は総じて説得的であり、又アベラールの論理学全体への一つの優れた視点を提供したものと評価できるのではないかと思う。

著者の本書における分析は我々を存在論と論理学の哲学の基本的問題へと誘う。私の場合は著者を通して提示された事から例えば次のような感想を得た。すなわち後に形式的な推論を積極的に取り入れ展開した論理学をアリストテレス分析論前書の人工言語と言ってよいとすれば、アベラールはまさしくカテゴリー論の言語について語っている。形式的には成立つはずの換位が成立たないという、本書においてしばしば登場する場面においては、何かについて何かを述べるということが何であるのかがまさしく問われているのである。この「何か」とは何かということ——それが普遍の問題にほかならないのである。

Alain de Libera : *Le problème de l'être chez Maître*

Eckhart : logique et métaphysique de l'analogie

(Cahiers de la revue de théologie et de philosophie 4)

pp. 63, Genève, 1980

大 森 正 樹

エックハルト (以下 E. と略記) の研究については、独・英語圏のものだけでなく、以前より仏語圏のものの中でユニークなものが多々見受けられる。例えば H. Delacroix のドイツ神秘主義に関するもの、P. Théry の研究、Ancelet-Hustache の研究と翻訳、V. Lossky の研究等がその中に数えられよう。ここに紹介する Alain de Libera の研究も僅か63頁という小冊子ながら、内容的にはそれに反し膨

大であり、ために却って圧縮された形になり、著者の思考を開陳するためにはもっと大部なものが要求されると思うぐらいである。

ところで E. にあって難問と思われるのは、彼の *esse* の問題であって、それをどう把えるかによって、彼が神秘家にもなれば、スコラ学者にもなり、また正統的キリスト教徒にもなれば、異端者にもなるという次第である。

著者も E. の *esse* についての教説には二通りあり、一つはアナログアから、もう一つは弁証法からする方法であるという。著者は研究の対象を E. のラテン語著作に限るのであるが、著者によれば、E. のアナログア論は「存在と無の弁証法の上に展開するものであって、その弁証法にあっては、被造物の存在は、創造主については『述語さえ』えないから、神を無と措定し、また創造主の存在は被造物については『述語され』えないから、被造物を無と措定する」。しかも E. にあっては、*esse* の説は神の存在と無と同時に被造物の存在と無をも表現し、「アナログアと弁証法は両立するのみならず、互いに補完する」。その上、「E. のアナログア論は彼の存在論の道具であるのみならず、それを明らかにする視点なのであり、また彼の思想全体における存在論的契機の意義と限界でもある」。(p. 1)

そこで著者は彼が「アナログアの形而上学」と呼ぶ観点のもとで、E. のアナログア論がどう展開されているかを見、それによって E. の *esse* 概念を明らかにしてしようとしているのである。

*

この書物は大きく三部に分けられている。1. 「存在の問題とアナログアの教説」、2. 「アナログアの形而上学としての存在の教説」、3. 「アナログアの形而上学と一性の教説」。

1. では E. の *In Exodum*, n. 54 と *In Ecclesiasticum*, nn. 52, 53 のテキストに注目しながら考察が進められる。その結果、E. の用いるアナログア論はアリストテレスやトマスに倣うものではあるが、しかし E. の獨創性も充分に存在する。それは *analogatum* についての存在論的問題が、*signe* や *désignation* という意味論的問題に転換しているというところである。同様に *esse* についても言語論的観点かものを言ってくる。だから、E. を神秘家であると考えている人には、このことは何か唐突で場違いな印象を与えるかもしれないが、しかし E. とて彼の同時

代人と同じ様な思考の特徴は備えており、E. は神学者であり、形而上学者であると同時に論理学者でもある。それ故、E. の形而上学というものを指定するとすれば、それは何らかの論理的理論を暗黙のうちに前提していると考えねばならない (p. 13)。

そこで次に E. の『意味論と存在論』を考察するが、それは『名辭と命題の意味論』を中心にして進められる。ここでも E. はトマスの意味論を基本としているのであるが、著者の独自の点は、トマスの *esse* と *essentia* の区別について反対した、同じドミニカンの Dietrich de Freiberg (1310年より少し後に没。以下 D. と略記) の影響を E. のうちに見ようとする点である。つまり著者は E. がトマスと D. のアナロギア論を和解させようとしたと考えるのである。そしてこの両者の理論への複雑な関係は、命題の意味論において明らかであると述べている (p. 16)。

この見地から、E. の意味論は同時代の他のものと比べてみても大変独創的であると著者は重ねて言う。そしてそこに D. の強い影響を見るのであるが、しかし D. 一辺倒というのではなく、トマスにも深く同調しているところがある。しかしこれを矛盾と受けとるのは早計であって、それこそが E. の存在一類比論の端的な表現である (pp. 26, 27)。

もともと E. の論理学は彼の形而上学を考慮した上での論理学であって、自らの形而上学的視野の中で、スコラの論理学の語彙や概念が再使用されている。それ故、トマスと E. ではその論理学の適用される地平が異っているのである (p. 20)。

次に『意味論としてのアナロギア』に移る。E. の説は要するに、いかなる被造物もそれが *ens hoc et hoc* であるかぎりには、存在を表示する命題の主語にはなりえないということであるが、但し、神に類比するかぎりにおいては主語たりうということである。そして、E. の *prédication* の説こそは彼の形而上学の真の土台であると言う (p. 39)。

2. ではアナロギアの形而上学が、*forma substantialis* のみが存在を与えるというトマスの理論の枠内で、*accidens* の存在論的な位置を明確にすることが主眼となる。従って神のみが固有の意味で *ens, unum, verum, bonum* ということは即ち、被造的存在者を対象とする総ての命題において *esse* は *inhérence* という仕方ですらされ、一方、神を対象とする命題においては、*esse* は神についてのみ述

語され、命題の主語と同一である (p. 40)。また、万物は神によってのみ、esse, unum esse, verum esse また bonum esse を持つということにより、そこから被造物が一、真、善たりうるという E. の説を細く検討する (p. 43)。

続く『アナロギアの形而上学と形相の一性』では、創造主と被造物の関係を問う。そしてマイモデスに依拠した、存在たる神と被造物の間には仲介者はないという E. の説を取り上げる (p. 44)。そこでトマスの forma substantialis の一性の理論が E. の形而上学にとり大変重要であることを指摘し、そこに生成についての問題が介在することを明らかにする。(またここでも E. は D. の原因についての説を考慮に入れていることが示される)。これによって génération instantanée と altération successive 間の対立が E. の『命題篇』の形而上学の基本的命題であることを明言する (p. 47)。

それと関連して『聖トマス・アクィナスによる実体的形相の一性』が検討され、E. の『パリ問題集』において彼の『三部作』の形而上学が完全に説明されており、その特徴はトマスの問題としたことを再び検討していることだと著者は言う (p. 53)。

そこで『「パリ問題集」第五と形相の一性の問題』が浮かび上り、『パリ問題集』の第五問題は殆んどトマス的ですらあることが示されるが、しかし仔細に検討すると、D. の説がそこに混在していることに気付く。その説が D. の *De corpore Christi mortuo* であると著者は考え、E. と D. のテキストを並記する (pp. 56, 57)。E. は 1312/1314年にトマスの実体的形相の一性を擁護し、その際 D. のテキストをその議論に用いたのであり、D. の思想が E. のスコラの教説の重要な源であると著者は断言する (p. 58)。

3. は本書の40頁で後に検討されると予告されたものを取り扱い、E. の「アナロギアの形而上学」が最後の問題となる。E. のアナロギアの形而上学は、質料—形相、部分—全体の関係に妥当することは、被造物—創造主の関係にも妥当するということである。しかしながら、ここから導かれることは、アナロギア的因果関係の問題を一性の教説の領域に移し替えることであり、これが E. の思想の基本的テーマなのである (p. 60)。この移し替えが可能なのは、実体形相の一性という教説以外のものではないと著者は言う。また E. のアナロギアの形而上学は、外見上相容

れないような二つの概念 (ad unum alterum というアナロギアのアリストテレス—トマスの概念と、下位—上位というネオ・プラトニズムの意味において再解釈されたトマスの *analogia proportionis*) の結合であって、これによると神は存在として表現され、そのため総ての実体は附帯有となり、総ての附帯有は無となる。それ故、アナロギアの形而上学はアナロギアの教説でもあり、一性の教説でもある。つまり神の *esse* が近づきえないものとして止るアナロギアの受動的側面からして、下位の実在の中へ第一原因が下り、拡散していくという理論に帰着する。即ち神は総てのものの中にあって、一であり、総てのものは神にあって一なるものである (p. 62)。こうした表現がしばしば神秘的であるととられ、E. の裁判にまで至るのであるが、被造物と創造主の間の距離のなさという表現は、飽くまで哲学的陳述であって、E. は *esse* が *totus intra, totus extra* であると言いたいのである。

*

以上が極めて簡略な内容紹介である。著者の博識と炯眼は、D. が E. に多大の影響を及ぼしていることを見抜いたのであるが、これによって E. のテキストを読んでいる、トマスのでもあるが、しかしトマスのでない一種の奇妙な印象の説明は可成り可能になると思う。

またこのように論理学から形而上学へというアプローチは、実際 E. のテキストから知られることであるが、その正面切っただけの研究は少なかつたように思えるから、この点でも E. 研究に資するところ大であろう。

しかし、第一部に頁を裂きすぎたせいか、特に第三部は簡略にすぎるように思える。著者はしかし、E. の神秘主義的側面については殆んど語らず、むしろ性急に E. を神秘主義者として判断することを戒めるものであるが、評者の望む所は、こうした論理的アプローチを一度経た上での、神秘主義的アプローチであって、もしその試みが成功すれば、それは単なる神秘主義的アプローチとは次元を異にしたものであり、E. 研究に更に新しい宝を積むことにならう。